如是我聞

にょぜがもん

お経は「如是我聞」からはじまる。

古代インド語経典の「このように私は聞いた」の漢訳で、「我聞如是」ともいい、仏教経典の冒頭にある定型句である。

お釈迦さまは生涯をかけて数多くの教えを説き明かされた。しかし、お釈迦さまに著書はない。説かれた教えは、その教えを聞いた弟子や信者たちの心の中に生き続けていた。

お釈迦さまは亡くなられた。

弟子たちは、「私の亡き後、私の説き残した教法と戒律とがお前たちの師である」というお釈迦さまの遺訓に従って、お釈迦さまの教えをまとめる編集会議を開いた。これを「結集」という。

お釈迦さまの滅後、マガダ国・王舎城外の七葉窟に五百人の弟子が集まって会議を開く。これが第一結集である。

常にお釈迦さまのそばにいて、もっとも多くの説法を聞いたアーナンダ（阿難）が中心となり、お釈迦さまから聞いた教えを皆の前で復唱し、弟子たちはたがいに記憶を再確認しながら、会議は進む。お経はこのようにして編集された。

そのとき、アーナンダは先ず「このように私は聞いた」と述べた。それは、お釈迦さまが「あらゆる経典の初めにこの言葉を記して、仏教以外の聖典と区別するようにせよ」と言い残されたからである、と伝説はいう。

「如是我聞」は、お釈迦さまの直説（仏説）であることを証明する言葉である。

親鸞聖人は『教行信証』の中で、「お経のはじめには、如是と仰せられている。如是という意味は、善く信ずるすがたである」（『註釈版聖典　第二版』［以下［註］と表示］三九八頁）と、説かれている。

「如是」は、聞かせていただいた教えに信順することで、「我聞」は、聞いたことを信じて疑わないことを示す。だから「如是我聞」は、「このとおりに、私は聞かせていただいた」と訳すべきか。

この本の最初の言葉には、「如是我聞」がよく似合う。